# 考古学的調査に基づく佐賀城跡の時期的変遷と土木技術

大　坪　芳　典

2025年 9 月

『西海考古』第15号　抜刷

# 考古学的調査に基づく佐賀城跡の時期的変遷と土木技術

大坪　芳典

## はじめに

佐賀城跡（註１）の考古学的な発掘調査は、1980年に佐賀県立美術館建設に伴う三ノ丸跡の調査が初めての事例である。その後、堀や城内の水路の調査が行われ石垣の基礎である胴木が見つかっているが、1990年代に入ってようやく佐賀城跡の建物跡を解明していく本格的な発掘調査が始まった。それは、1989年に佐賀県の香月知事（当時）が、歴史資料館を佐賀城本丸跡地に建設する事を表明したため、その建設に先立ち、1993年から佐賀市教育委員会と佐賀県教育委員会により佐賀城本丸跡の発掘調査が開始された。この一連の調査は、1995年まで行われて、本丸御殿跡の建物基礎、本丸南西隅櫓台の石垣、本丸西側土塁などが確認された（註２）。これらの発見により、本丸跡には、幕末の天保期に佐賀藩10代藩主の鍋島直正が再建（1838年完成）した本丸御殿の一部を復元する形で資料館が建設され、その施設が佐賀県立佐賀城本丸歴史資料館である。この様に佐賀城跡の建物跡の配置などを確認できる発掘調査は、1990年代よりようやく始まったといえる。逆に言えば、それ以前の佐賀城の歴史については、文献史学による研究の成果が主体であり、佐賀城跡の研究と言えば、近世期の研究が中心であった。

今回は、その90年代以降に筆者が、佐賀城跡で担当・従事した幾つかの調査が近世のみでなくそれより古い時代の調査の機会に恵まれた事もあり、その発掘調査で得た結果や知見を基に考古学的な目線で当時の土木技術を分析し佐賀城跡の時期的な変遷を解明したい。

## １　佐賀城跡の立地的環境

佐賀城跡（第１図、写真１）は、佐賀県央に位置する佐賀市の南部に所在し、城内は、近世の佐賀城の外堀や内堀の残りが良く、佐賀城本丸跡には天守台や国指定重要文化財である鯱の門や続櫓が現存する。また、先述した通り本丸御殿の一部が復元され、本丸・二ノ丸跡周辺では堀の復元整備が進められている。城内の現状としては、それらの近世の佐賀城跡の景観を残しつつ、現在、佐賀県庁や県立の博物館・美術館・図書館・歴史資料館・高等学校などの公共施設があり、住宅地も密集しているような状況である。

当城跡の立地的環境は、広大に広がる佐賀平野上に立地し、城より西側には山間部脊振山系に発し、佐賀平野を南北に流れ有明海へ注ぐ一級河川である嘉瀬川が位置し、城より東側には同じく脊振山系に発し、佐賀平野を南北にながれ筑後川水系の佐賀江川に合流する一級河川である城原川が位置する。城の南側には干潮時、潟になる有明海が、城の南西には筑紫次郎の異名をもつ九州地方最大の河川である筑後川が位置する。

佐賀城跡の立地を巨視的に俯瞰して見た時に、北は脊振山系が壁の様にそびえて、東西に嘉瀬川と城原川、南西に筑後川、南に有明海に囲まれた状況は、いわば天然の堀に囲まれた要害と言える。ただし、佐賀城跡は平城であるが故に、周辺の外敵からは城の様子が一目瞭然であったと考えられる。その代表例としては、永禄12（1569）年に大友宗麟は、龍造寺隆信を攻めるため西の佐賀城が立地した佐賀平野を見渡せる筑後国高良山の吉見岳城（久留米市）に本陣を置いている（註３）。ところが、元亀元（1570）年に龍造寺氏の居城である佐賀城（以後、**中世佐賀城**と略する）に向けて侵攻するが、

佐賀城内は籠城の末、逆に龍造寺隆信の家臣の鍋島信正（後の佐賀藩祖直茂）が城外の今山の陣において大友軍の総大将である大友親貞を討ち取った（註３）。この今山の戦いにより、中世佐賀城での防衛がいかに要害な城であったのかを示す事例と言えよう。しかし、この中世佐賀城は、近世の頃の佐賀城（以降、**近世佐賀城**と略する）より下層に埋没しているため、現状では地表面では確認できない状況である。

一方で近世佐賀城については、規模や構造を知る手掛かりは中世佐賀城に比べて多い。佐賀藩祖の鍋島直茂と佐賀藩初代藩主の勝茂により、龍造寺氏の居城を拡張・整備した頃の近世佐賀城の周囲には、幅約40間におよぶ広い外堀が巡っていた。現在の佐賀城跡の外堀の状況は、東堀が埋め立てられており、現在徐々に復元整備工事が進められている。その他の北堀・南堀が当時の外堀の姿に近いものの部分的に埋め立てられており、当時の外堀の堀の形状を留めているのは、唯一西堀の西御門前の土橋より北側部分のみである。その西堀北半の堀の形状は、城外側が直線的な平面形状を成すが、城内側は曲輪の形状により入り組んでいる。そのため、西堀北半の堀幅は、均一ではなく約62～82㍍と他城と比較してもかなり幅広な外堀と言える。城内は、本丸・二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸・重臣屋敷の曲輪で構成されており、曲輪を区画するように内堀が巡らされている。また、城の周囲には、土塁（土居）で囲まれていたが、現在の土塁（土居）状況は、西堀の堀端に僅かに残るのみで当時の土塁（土居）の高さを残す所は皆無である。現状、城内に埋立地が多い事から、当時の土塁（土居）は、昭和期までに外堀や内堀などを埋め立てるための造成土に用いられたのではないかと考えられる。

佐賀城外堀のさらに外域には、北側に幅約10間（約1.8㍍）の十間堀、西側には本庄江、東側には八田江といった堀を周囲に配して、その内側の城下までも包括する広大な総構（第２図）を形成する城であった。総構の規模は、東西に約3.6㌔（計測地点は東端が佐賀市末広１丁目11で西端が佐賀市木原１丁目１の間の堀を含めた距離）、南北に約1.3㌔（計測地点は北端が佐賀市唐人２丁目１で南端が佐賀市本庄町袋356の間の堀を含めた距離）に及ぶ。その総構の東西隅部の外側には、２つの出城が設けられていた。佐賀城総構の鬼門に位置する北東部には大財端城跡が、北西部には多布施館跡（多布施出城）を配し、北側の防備を固める役目があったと考えられる。佐賀城総構は、その規模と幾重にも堀を配し曲輪をもつ堅固な城郭構造である。

そして、佐賀藩家臣の成富兵庫茂安は、江戸時代初期に中世まで嘉瀬川の本流であったのではないかと言われる「多布施川」の整備を行っている。そして、佐賀市大和町に石井樋を築いて、嘉瀬川から石井樋で水量調節をし、多布施川に水を引き込んでいる。その多布施川は、佐賀城下を通り、佐賀城内に上水道として整備された。佐賀城の外堀の箇所では、その外堀の水と上水道としての多布施川の水が混じらないように高度な技術を駆使して立体交差状の構造で城内に引き込んでいる。その多布施川は、城内では内堀としての役割も兼ねていた。佐賀城本丸跡の発掘調査において、通称赤石で組まれた暗渠状の石樋が確認されており、嘉瀬川から引き込まれた上水道は、城外の多布施川→城内の内堀→二ノ丸跡（幕末御殿再建前は、御殿の所在地）→本丸御殿跡の順で流れている事を考えると、多布施川の水路は、本丸御殿跡まで到着するまで上水道として汚水が混じらないように管理が成されていたと考えられる。この様に慶長期より始まる佐賀城の拡張・整備の総普請では、城内のみでなく城外の城下町や水利などの整備も大規模に行われている。

## ２　佐賀平野における低平地城館跡と中世佐賀城について

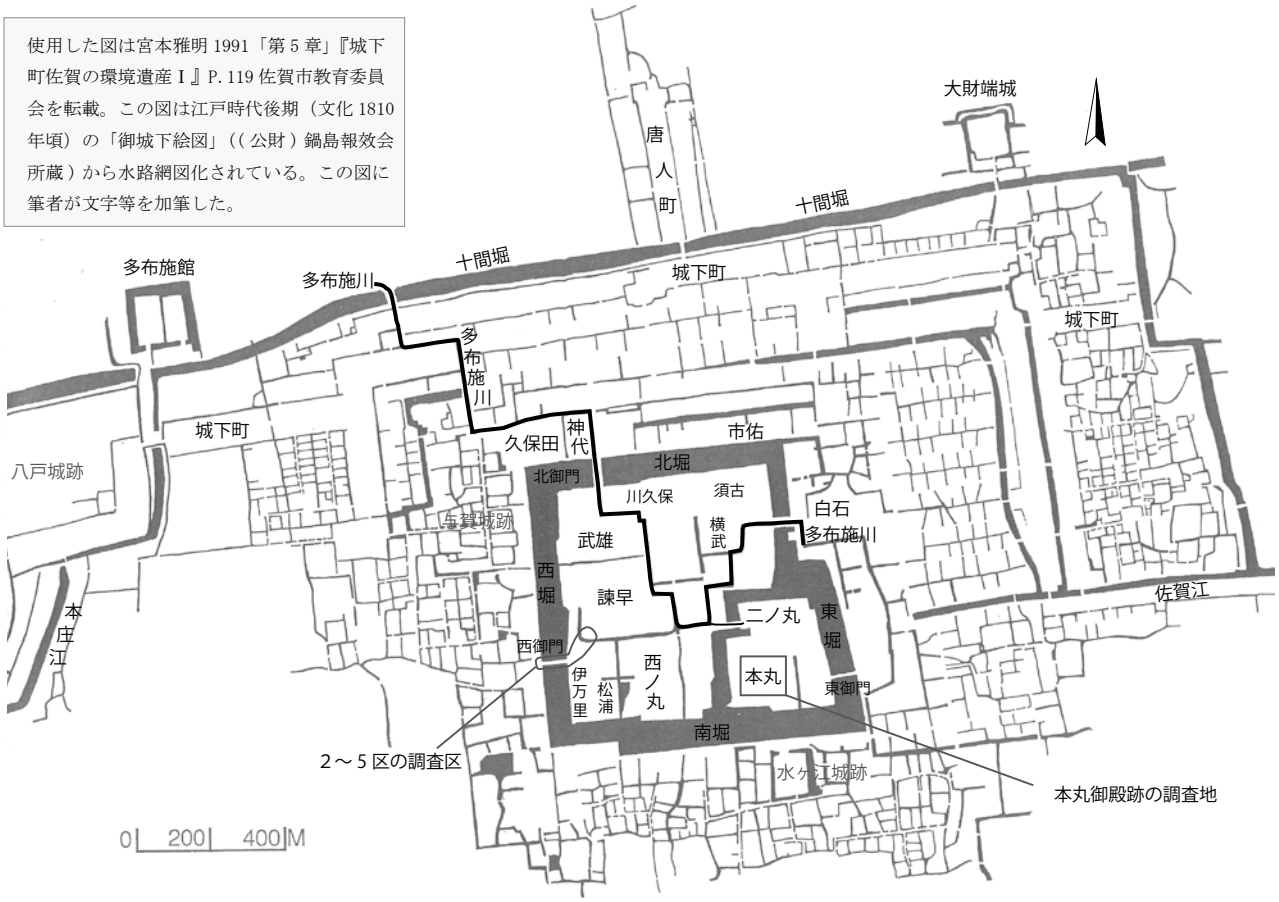
立地的環境において佐賀城跡の大まかな立地を説明したが、さらに佐賀城の立地的な特性や構造を理解するために、中世の佐賀平野における「低平地城館」と呼ばれる城の特性を説明したい。

**第１図　佐賀城跡位置図（縮尺は各図左下）**

ドローン撮影（筆者撮影）　佐賀城公園上空は条例で飛行が禁止されているため、城外南方向からの撮影

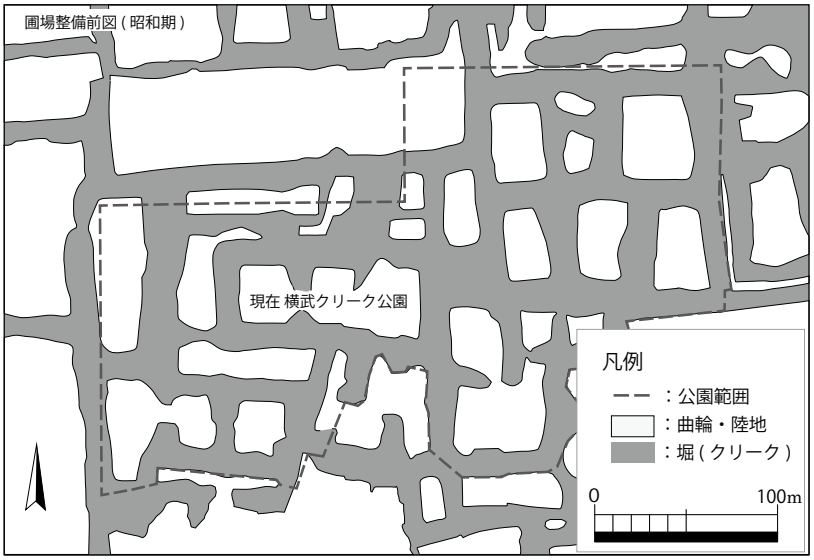
**写真 1　佐賀城跡俯瞰**

使用した図は宮本雅明 1991「第 5 章」『城下町佐賀の環境遺産 I 』P. 119 佐賀市教育委員会を転載。この図は江戸時代後期（文化 1810 年頃）の「御城下絵図」（（公財）鍋島報效会所蔵）から水路網図化されている。この図に筆者が文字等を加筆した。




**第 2 図　佐賀城総構図（縮尺は任意）**

佐賀平野における
低平地城館
横武城跡




**第３図　横武城跡図（Ｓ＝1/40,000）**

ドローン撮影（筆者撮影）

**写真２　横武城跡俯瞰（北から撮影）**

佐賀平野における
低平地城館
直鳥城跡

千代田町教育委員会1999『直鳥城跡』報告書写真図版より転載

**写真３　直鳥城跡俯瞰（写真上が北）**

佐賀平野は、筑後川・嘉瀬川・六角川等の主な河川が有明海に注ぐ事と、潮の満ち引きにより形成された有明粘土層と呼ばれる沖積粘土層が堆積しているため軟弱地盤である。この佐賀平野は、標高５ｍ以下の値に網の目の如く溝渠（クリーク）が張り巡らされた低平地である。

佐賀平野における16世紀頃の中世佐賀城跡周辺の主要な城館跡は、当城の南東に隣接する龍造寺庶子の水ヶ江城跡、西に隣接する少弐氏の与賀城跡、さらに西に１㌔も行かないところに八戸氏の八戸城跡が位置する。中世佐賀城跡の周辺の何れの主要な城館も１㌔以内の狭い範囲に隣接・近接している。中世佐賀城は、近世佐賀城の整備によって１㍍程嵩上げされているため発掘調査などにより発見されない限り曲輪の配置や状況は不明であるが、その他の水ヶ江城跡・与賀城跡・八戸城跡は、標高２～４㍍の低平地に溝で囲まれた浮島の集合体のような島状地の曲輪（註４）で構成されていたと考えられる。

中世佐賀城跡より西の千葉氏の高田城跡も低平地に溝で囲まれた浮島の集合体のような曲輪で構成する。中世佐賀城跡より北に高木城跡が位置しているが宅地化が進み旧地形の残りが悪いため、曲輪の構成や特徴は不明瞭であるが、発掘調査により標高４～５㍍から建物遺構や幾条かの溝が確認（註５）されている。東の江上氏や少弐氏の勢福寺城の辺りから南に走る城原川の右岸には、北から順に横武氏の横武城跡（第３図、写真２）、本告氏の本告牟田城跡、姉川氏の姉川城跡、直鳥氏の直鳥城跡（写真３）、小田氏の小曲城跡があり、その南で大河川の筑後川と合流する。これらの城も低平地に溝で囲まれた浮島の集合体のような曲輪によって構成されている。

浮島状の曲輪の構成については、宮武正登氏が分類を行っており、ほぼ同一規模の浮島状の小空間が密集しているもの（佐賀市兵庫町周辺の若宮集落、牟田集落や神埼市千代田町の大石集落等）と、その島群の中核位置に突出した面積を誇る空間を有するもの（神埼市姉川、佐賀市千代田町直鳥等の各集落）とに大別し、後者には、集落の中心エリアに「館」の地名や城郭としての所伝を付帯するものが特徴的であり、領主層在村型の集落であった形跡を留めているものとしている（註６）。後者の分類に入る本告牟田遺跡（本告牟田城跡）では、10～30㍍程の約20個の島から構成を成し、その中央には館の内と呼ばれる地名が残っており南北120㍍、東西100㍍程の大型な島状地が見られる。発掘調査により、各々の島と中央の島には溝により幾つかの区画が行われていた（註７）。

国指定史跡の姉川城跡跡は、幾つかの島の中央に南北110㍍、東西50㍍程の大型の主郭である島状地が見られる。その主郭では、16世紀中頃から後半の大型建物跡が確認された。また、龍造寺氏の家紋入りの瓦が出土しており、姉川氏以降に龍造寺氏の城となっていた事が窺える。この報告書で河野氏は、神埼市の同規模の島が集まった城としての伝承が残っていない環濠集落（下六丁（註８）・上六丁・莞牟田環濠集落等のⅠ類）と姉川城等のように伝承が残っているもの（Ⅱ類）とに分けて考察（註９）している。氏は、横武城跡の報告書の考察で、姉川城跡で分類した前者をⅠ類、後者をⅡ類とした。この内、Ⅱ類をさらに分類してⅡ－ａ－１類は、環濠居館、例えば単純に居館のみを溝が囲むもの。Ⅱ－ａ－２類は、Ⅱ－ａ－１類に複数の小規模な島が付くもの。Ⅱ－ｂ－１類は、横武城跡のように中心となる島があるものの、ほぼ同規模の島が集り、その求心性は弱い平地式城館のもの。Ⅱ－ｂ－２類は、本告城のように求心性の高い島の配置をした平地式城館もの。Ⅱ－ｃ類は、姉川城跡や直鳥城跡のように平地式城館に集落を取り込んだもの。Ⅲ類は本格的な城下町を形成するもので環濠集落の範疇では捉えられない段階と細分している（註10）。つまり、河野氏は、宮武氏が分類（註６）した前者がⅠ類に当たり、後者をⅡ－ｂ－２類とⅡ－ｃ類に細分し、新たに横武城跡の事例からⅡ－ａ－１（横武城跡Ⅴ区）・２（柳郷城跡）類とⅡ－ｂ－１類（横武城跡）とⅢ類（蓮池城跡）を追加している。

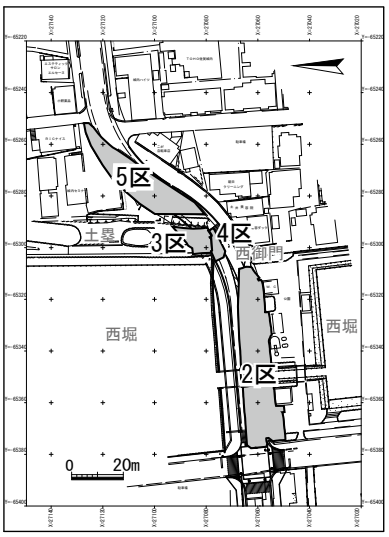
さて、中世佐賀城跡は、近世佐賀城の整備・拡張の際の総普請による造成で地中に埋まっており全貌が不明である。16世紀後半の龍造寺隆信・政家の頃の中世の佐賀城については、文献に「竜造寺ノ城跡ハ今ノ北ノ御門ヨリ一町計り南ノ辺也」（註11）と書かれており、その曲輪の構成は「龍造寺本丸ハ今ノ諫早屋敷、二丸ハ多久屋敷也、泰長院ハ元ハ西ノ丸ニ在シ」（註11）事が書かれている。その館周辺の曲輪の正確な配置については文献等では不明だが、近世佐賀城で見られるように本丸・二ノ丸・三ノ丸・西ノ丸の他に約十箇所の家臣団屋敷といった多くの曲輪により構成する点や龍造寺分家の水ヶ江城もまた多くの曲輪により構成するような様相から考えて、中世佐賀城も佐賀平野における低平地城館で大多数を占める浮島の集合体のような島状地の曲輪と同様に龍造寺館を中心として島状地の曲輪により構成していた可能性が高い。そして、龍造寺政家の子である高房が家督を継いだ翌年の天正19（1591）年、従来あった本荘町に加えて「蛎久ヨリ佐嘉へ町御引移シノ時、六座町・伊勢屋町・中町・白山町ヲ始ニ御引ナサレ」（註12）とあるように、中世佐賀城の最終段階には、16世紀後半の龍造寺氏の急成長に伴い、16世末には恐らく分家の水ヶ江城や廃城となっていた旧与賀城を吸収合併しだし、その城下を形成しつつ巨大規模（註13）化していった事が考えられる。以上の事から、当該期の中世佐賀城は、不明瞭な点も多々あるが宮武氏の後者の分類か、河野氏のⅡ－ｃ類かもしくはⅢ類の範疇に収まると思われる。

### 3　佐賀城跡５区における中世佐賀城の調査と古代の遺構

佐賀城跡５区（第２・４～６図）は、2010年に佐賀城内を東西に走る都市計画道路場内佐賀線改良工事に伴い、佐賀市教育員会の監督のもと、佐賀市建設部道路整備課から委託を受けた㈱埋蔵文化財サポートシステムが発掘調査を実施した（註14）。筆者が現場を担当した佐賀城跡５区の調査は、西御門・桝形虎口の東側に位置する城内側の通路部分が想定されていたが、実際確認された近世佐賀城跡に伴う主要な遺構は内堀であった。５区は、調査前に建っていた大型の現代建物跡のコンクリートの基礎により大部分が撹乱されていたため、あまり古い遺構は残っていないと思われていた。この調査以前に実施された佐賀城跡２～４区の調査（第５・６図）では、近世面より下層から中世の遺物や僅かにピットや溝が確認されていた事や龍造寺氏の居城である「村中城」と呼ばれていた城跡が眠るかもしれないとの伝承があり、その確認もありトレンチを入れて調査したところ、近世佐賀城跡の面より、0.7～0.8㍍下層から中世の時期の遺構が確認された（第６図）。そのため、当初、近世面のみの調査が対象であったが、急遽、市の道路整備課と佐賀市教育委員会と交え、下層調査の対応について協議した結果、調査を行う事に決まった。近世面（標高約３ｍ）より0.7～0.8㍍程の深さで確認できた主要な中世後期の遺構は、16世紀中～後半の遺物を含む大型建物群と小型建物群、堀や区画溝であった。大型建物群は、ＳＢ5200とＳＢ5205掘立柱建物跡が東西に並んで２棟を確認した。その内、ＳＢ5200は、桁行５間以上（以上とは調査区外に続く可能性があるため）×梁行３間で、柱間の距離が平均約２㍍前後、床面積52.44㎡以上で非常に大規模な建物と言える。この大型建物群の南側には、ＳＢ5043・5090の溝で区画するかのように小型建物群が３棟確認できた。この小型建物群の内の１棟であるＳＢ5040からは柱材が確認され、その柱材で放射性年代測定を行った結果、1550～1630年付近の可能性が高い数値が出ている。これらの建物跡群の北側に塀か柵の可能性があるピットが並び、さらにその北側にはＳＤ5218という備前焼の平鉢や土師器などの中世の遺物を含む大溝が確認された。ＳＤ5218の規模は、幅5.3㍍、深さ2.4㍍以上（以上とは安全上、これ以上掘削する事が不可能であったため）、溝法面の勾配が50～70°といった急勾配な大溝であった。これらの大型建物跡を中心に取り囲む塀及び堀や区画溝は、防御施設の機能を有しており、近世佐賀城を拡張・整備する以前に存在し

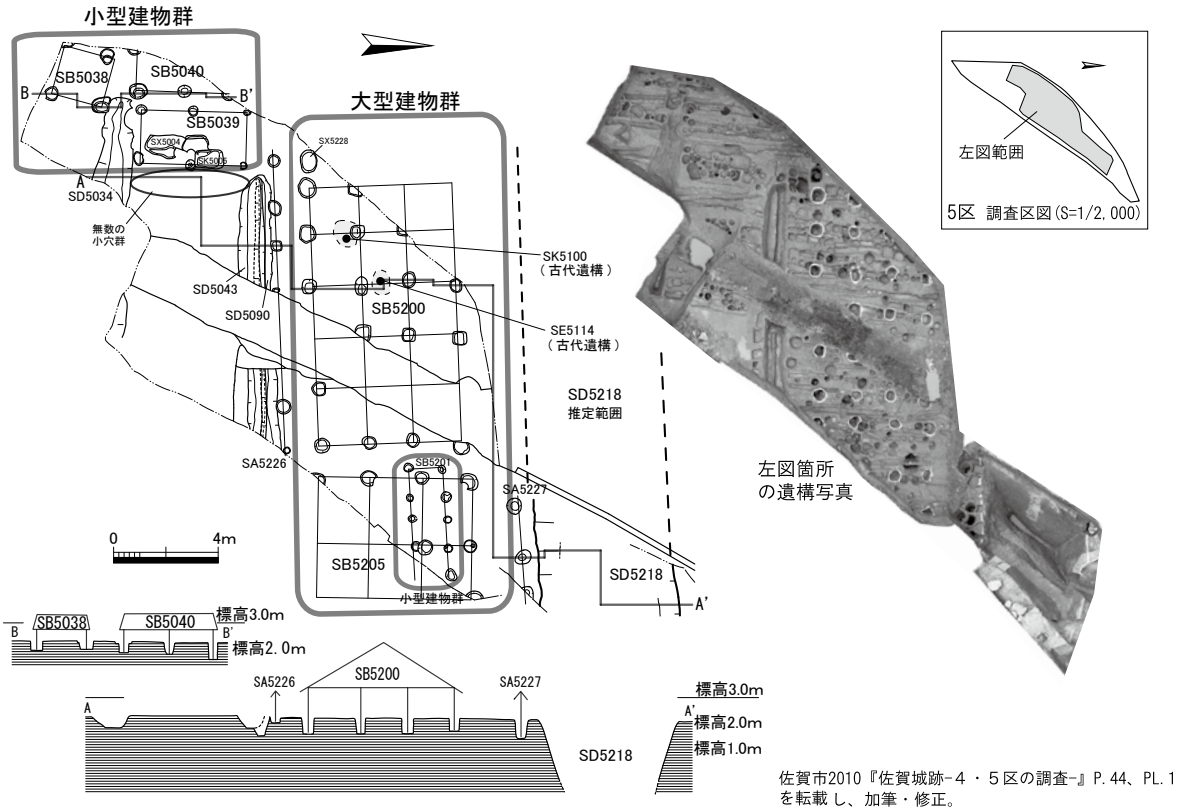
（公財）鍋島報效会2009『御城下絵図に見る佐賀城のまち』に収録されている「御城分間御絵図」（（公財）鍋島報效会所蔵）P.29を参考に作成

**第 4 図　佐賀城内における調査区位置図（S＝1/10,000）**




佐賀市2010『佐賀城跡−４・５区の調査−』P.7を転載し、一部加筆・修正。

**第 5 図　佐賀城跡 2 ～ 5 区位置図（S＝1/3,000）**




佐賀市2010『佐賀城跡−４・５区の調査−』P. 44、PL. 1を転載し、加筆・修正。

**第 6 図　佐賀城跡 5 区の中世主要遺構配置図・建物遺構摸式図（S＝1/300）と遺構写真**

ていた龍造寺居城である中世佐賀城（通称、村中城）内の龍造寺氏一族の屋敷か、その家臣の屋敷か、瓦が１点出土していることから中世佐賀城（村中城）内にあったと伝わる寺院の可能性もある。いずれにしろ、これほどの規模の建物跡遺構と防衛機能が高い大型の溝を兼ね備えているという点で中世佐賀城（村中城）内の可能性が高いと言えよう。

また、佐賀城跡５区の調査では、ＳＫ5100土坑とＳＥ5114井戸の２基が平安時代の古代の遺構であった。特にＳＫ5100からは、10～11世紀の遺物が出土している。これらの遺構は、中世の遺構の掘削の最中に中世遺構より下にある事が偶発的に確認された遺構であるが、他にも古代の遺構を構成する生活面が存在する可能性もあったが、本調査では中世佐賀城跡を削平してまでは古代の遺構を確認する事は行わなかった。

この中世佐賀城の名称については、佐賀城跡５区の調査報告書の考察を執筆する際に調査したことがあるが、江戸時代以前の龍造寺関連の文書や文献を確認すると「佐嘉城」、「龍造寺城」、「村中城」や龍造寺氏居城の佐賀城であるため「龍造寺佐嘉城」などと書かれている。後世、「村中城」と呼ばれる事が多いが、村中城（第10図）とは、1944年に出版された『佐賀市史』上巻の第二章第二節に村中城を築くと題し書かれている中で「龍造寺村に城を築きて村中城と称した。蓋し龍造寺村の村内に在る城郭であるから、其名が起ったものであろう。」（註15）と書かれており、佐賀市の歴史書を代表する市史に村中城という名称が用いられている事も比較的、近代の研究者が村中城の名称がさらに浸透し定着した可能性がある。本稿では、さほど呼び名にこだわらず龍造寺氏が居城とした佐賀城（佐嘉城）の名称を、近世鍋島氏の居城と区別して、引き続き中世期の佐賀城と呼び、それを略して「中世佐賀城」とする。

龍造寺氏の居城は代々、佐賀城跡の地に所在したと伝わる（註15）。中世佐賀城内の状況やその時代背景を理解するためには、龍造寺氏一族と中世佐賀城にまつわる歴史について整理する必要がある。龍造寺氏は平安時代末期の久寿元（1154）年、九州に下向した藤原季喜（すえよし）が佐賀郡小津郷龍造寺村の領主となった（註16）。その龍造寺村というのが、佐賀城跡の場所と考えられており、季喜は、佐賀郡で勢力があった高木季経（すえつね）の次男季家（すえいえ）を養子に迎え入れ、その季家は、源範頼の平家追討に従軍した功績や神崎荘の住人海士重実が院の御領神崎荘への乱入を鎮圧した活躍により、文治２（1186）年、季家は鎌倉幕府の御家人とする旨の下文を受ける。これにより小津東郷内龍造寺村田畑の地頭職に任ぜられて龍造寺氏を称する事になった（註17）。藤原季喜がこの地に屋敷を構え、龍造寺氏と名乗るのはこの頃からと言う事であるため、佐賀城跡５区で確認された古代の遺構は、これらと関連する遺構の可能性がある。

南北朝時代、龍造寺氏は、龍造寺村の地頭職から外され、代わって今川頼貞が知行しているが、天授２（1376）年、龍造寺家是（いえこれ）の頃に懐良親王から龍造寺村惣領分を返還されている（註18）。中世佐賀城外の南東に位置する槇村（現在の中の館町）に龍造寺家兼（いえかね）の父の康家によって別館として水ヶ江城は、築かれるが、水ヶ江城を改修し、中世佐賀城を居城とした龍造寺宗家から分かれて水ヶ江龍造寺家が始まる（註19）。この龍造寺氏の中興の祖として名高い家兼は、後に出家し剛忠（こうちゅう）と名乗る。享禄元（1528）年、大内義隆が、筑前国守護代の杉興運を少弐資元らの城である勢福寺城へ向けて派遣した田手畷の戦いにおいて、家兼は少弐氏を助けて活躍する。そのため、小弐氏からの信頼が厚くなり、馬場頼周をはじめ少弐家近臣の妬みをかう事になり、天文13（1544）年、策略により多くの龍造寺一族が討ち取られた。翌年、水ヶ江城を開城し筑後国に落ち延びていた剛忠は、水ヶ江城を再び奪還し、龍造寺家当主の胤栄（たねひで）と共に馬場氏を打ち果した。しかし、その胤栄は、少弐冬尚により中世佐賀城（村中城）から退かさせられた（註３・19）。天文15（1546）年、胤栄は筑前国にいたが本領に

帰りたいとの思いで大内義隆からの援助により佐賀の領地を回復して、少弐冬尚を誅伐すべく肥前守護代として中世佐賀城へ帰国した（註20）。天文17（1548）年、龍造寺宗家当主胤栄の卒去により、お家の断絶が危ぶまれたため、水ヶ江分家の城主であった龍造寺胤信（たねのぶ）（後の隆信）が龍造寺宗家と水ヶ江分家を相続した。これにより龍造寺隆信が中世佐賀城の城主となった。隆信の相続を快く思わなかった家臣の土橋栄益らが水ヶ江城及び中世佐賀城を包囲して、隆信は筑後へ退いた。天文22（1553）年、隆信は筑後国の蒲池氏の援助により川副郷の領主の力を得て、中世佐賀城へ帰国を果す（註３）。この様に中世佐賀城は、龍造寺氏から幾度となく城を奪われる事があったが、粘り強く奪還している。同年、剛忠の頃に一族を滅ぼされた恨みを果すために、隆信は、佐賀で勢力があった少弐時尚（冬尚の改名）の居る勢福寺城を攻め落とし時尚は自害した（註３）。この頃の情勢は、中国地方では天文20（1551）年に陶隆房の内乱により義隆が自刃したことを受けて、龍造寺氏の後ろ盾であった大内氏の九州地方における勢力が後退していった。変わって、中世の有力者の大友義鎮は、永禄５（1562）年、出家して宗麟と号し、永禄12（1569）年、大友宗麟は、筑後国高良山の吉見岳城に本陣を置き、佐賀平野の北路から三千の大軍を投じて進攻して来たため、毛利の援軍を待ち中世佐賀城内で籠城した（註３）。この時、龍造寺軍、同時に道路や橋を修理して溝を深め、土手を高くして籠城の構えを厳重にした事を記述している（註19）。隆信は、一度は大友氏と和平したが、元亀元（1570）年、再び宗麟は大軍で佐賀に攻めて来た。再度、窮地に追い込まれた龍造寺軍は、中世佐賀城に籠城した。龍造寺軍の鍋島信正（後の佐賀藩祖直茂）は、今山の戦いで大友軍の総大将の大友親貞を討ち取った（註３）。その後、龍造寺隆信は、戦国大名と言われるまでに勢力を増し、居城である中世佐賀城もその富と力をもって整備されていたと考えられる。隆信は子の政家に家督を譲り、天正３（1575）年、隠居地とした白石町須古城を普請すると共に本城の「佐嘉龍造寺の城、四方の総構を築き、牛島敵操の土手の松を植う。其役成富甲斐守なり」（註３）として守りを固めており、これが厳密に言うと中世佐賀城の最終形態であると考えられる。天正16（1588）年、その政家もその子高房に家督を譲り同市久保田町の太俣に隠居し、高房が中世佐賀城を受け継いだ（註３）が、鍋島直茂・勝茂に実権が移り、龍造寺宗家は高房の代で終わるとともに、中世佐賀城も終焉を迎える。

その地中に眠る中世佐賀城跡の状況について考察すると、佐賀平野の低平地城館で書いた通り、大多数を浮島の集合体のような島状地の曲輪という佐賀平野の低平地城館の一般的な様相と考えられ、龍造寺館（主郭）を中心として島状地の曲輪により構成されていた可能性が高い。中世佐賀城の最終段階、つまり16世紀後半の龍造寺隆信や政家の頃の急成長に伴い、16世末には恐らく分家の水ヶ江城や廃城となっていた旧与賀城を吸収合併した中世佐賀城は、その城下を形成しつつ巨大規模（註13）化していたと推察できる。５区で見つかった遺構は、建物跡の規模が大きく、区画溝を有し、それらを守るがごとく、異常な程の深さと幅広な堀に守られる形で見つかっており、その防御機能を有している遺構の状況から、近世佐賀城を拡張・整備する以前に存在していた中世佐賀城の中でも龍造寺隆信や政家が築いた最終形態の城内遺構の一部であった可能性がある。

また、中世佐賀城跡の位置については、「慶長年中肥前国絵図」では佐賀城跡の位置に「竜造寺城」の名があり、『直茂公譜考補十』には更に詳しく「竜造寺ノ城跡ハ今ノ北ノ御門ヨリ一町計り南ノ辺也」（註11）とあり、この「今ノ」とは近世佐賀城の北ノ御門より一町南の辺りの場所は、現在の県立佐賀西高等学校や若楠会館付近や近世の西ノ丸辺りを指している。次に中世佐賀城跡の曲輪の構成については、同じく『直茂公譜考補十』に「龍造寺本丸ハ今ノ諫早屋敷、二丸ハ多久屋敷也、泰長院ハ元ハ西ノ丸ニ在シ」（註11）との記載があり、つまり龍造寺隆信等の当主のいた一ノ郭（主郭）が近世佐賀城の頃の諫早氏の屋敷の場所で、二ノ郭（曲輪）が近世の頃の多久氏の屋敷があった場所で、

泰長院などの寺院があった場所が近世の頃の西ノ丸と言う事になる。1944年に出版された『佐賀市史』（註15）には、「村中城之図」（第10図）が描かれており、近世佐賀城の略図上に中世佐賀城の配置を描かれている。その図には、先述した泰長院に加えて無量寺、大儀庵、瑞麟軒も併記され、その東側に三ノ郭（曲輪）、一ノ郭（主郭）の北西側に龍造寺と八幡宮なども記されており、城内には寺院等も存在していたようである。数少ない文献やこれまでの歴史学の研究と照合すると、５区で見つかった遺構は、中世の曲輪の一ノ郭（主郭）と泰長院、無量寺、大儀庵、瑞麟軒との間に位置していた事になる。

５区の調査では、近世の遺構面から中世の遺構面までの掘削深度は、0.7～0.8㍍程であった。鍋島直茂・勝茂により「龍造寺ノ御城ニ曲輪ヲ被相増、新ニ惣御普請アリ」（註11）と書かれているように、慶長13（1608）年から16年をかけて近世佐賀城の総普請が行われた。この0.7～0.8㍍程の堆積層については、「堀の土ヲ以テ御城惣家下ヲ高メサセラレ、又土手ノ御構エニ成リシト也」（註11）とあるように、中世佐賀城を東に拡張・整備し周囲に幅40間の外堀を巡らせ、外堀を掘った排土については、城内や土塁に嵩上した際の盛り土や造成した痕跡と考えられる。この総普請により、一般的に龍造寺氏の居城である佐賀城を拡張・整備したと言われるが、龍造寺氏から鍋島氏へ権力が移譲する転換の象徴として、鍋島氏の居城としての佐賀城が築城したと言えるのではなかろうか。このように５区の発掘調査では、龍造寺氏の居城から鍋島氏の佐賀城に転換する過程が、文献資料を裏付ける形で考古学的に堆積状況や検出状況により確認できた事が重要である。

## ４　佐賀城跡３・４区西御門・虎口出角部付近における近世西堀護岸の調査

佐賀城跡３・４区（第５・７図）は、３区（註21）が2007年に、４区（註14）が2010年に佐賀城内を東西に走る都市計画道路城内佐賀線改良工事に伴い、佐賀市教育員会の監督のもと、佐賀市建設部道路整備課から委託を受けた㈱埋蔵文化財サポートシステムが発掘調査を実施した。筆者が現場を担当した４区の調査は、佐賀城跡西端の近世佐賀城跡の西御門・桝形虎口付近に位置する。「西御門」とは、近世佐賀城跡の周囲に北御門・西御門・東御門という３箇所設けられた門の内の一つである（註22）。この３・４区においては、土塁が確認されているが、この土塁により囲まれているのが桝形虎口であり、2006・2007年に調査された２区の西堀に設けられた土橋から侵入してくる敵を虎口で遮る役目の門（西御門）が設けられていたと考えられる。この４区の桝形虎口は、台のように西堀側に若干張り出しており、安産岩質凝灰角礫岩の地元で通称「赤石」と呼ばれている石材が積まれている。構造としては、並行する２本の胴木の上に石積みをし、今回は虎口北西隅の出角部（註23）の調査であったが、石積角石の背面は花崗岩の円礫が裏込めされていた。

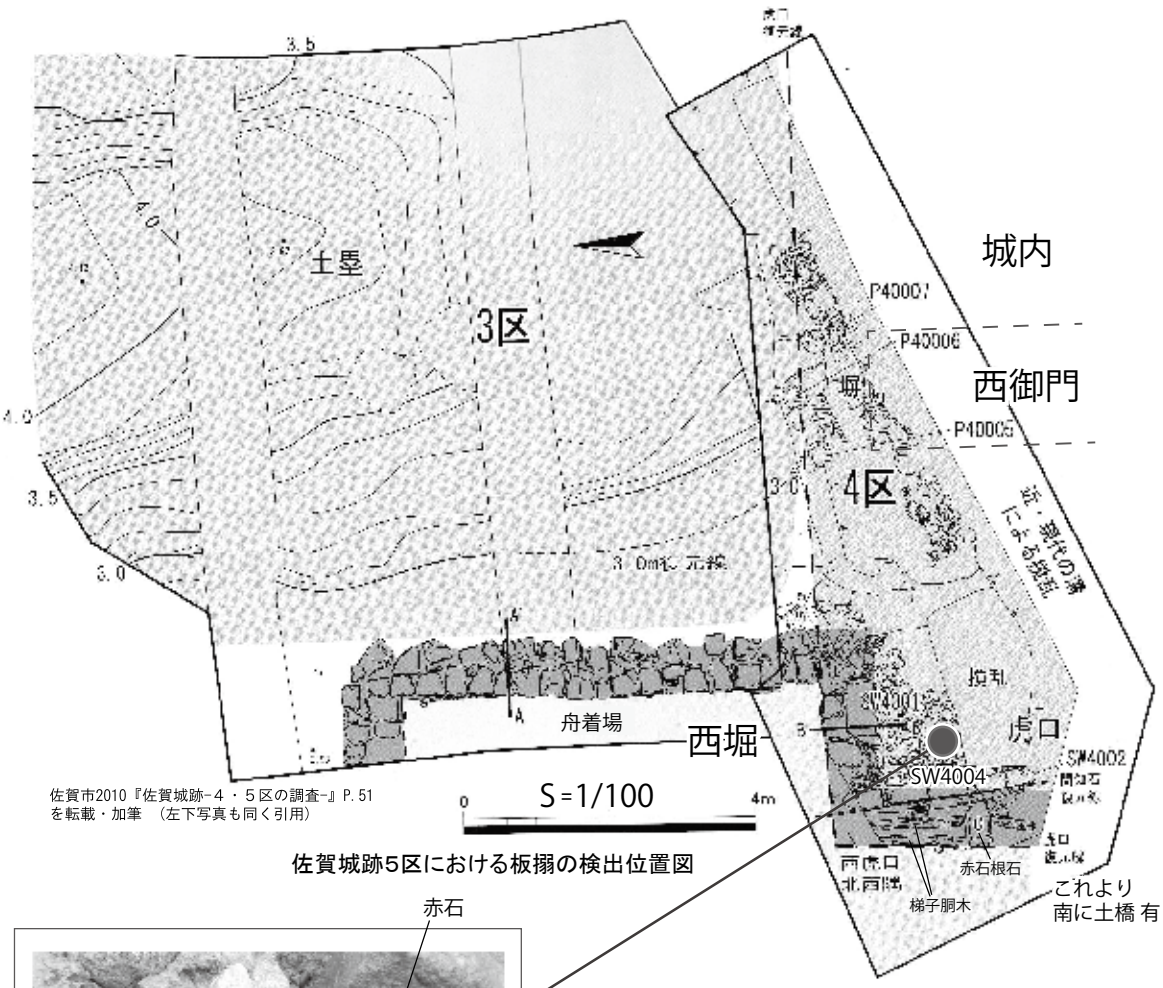
その赤石石積の背面の位置で、赤石石積の裏込め石を取り除く際にその下の地点から、佐賀で文献などにも記載されている「板搦」（註24）と呼ばれる佐賀城跡の土木技術を示す貴重な遺構が確認された（第７図）。佐賀城は、慶長期の総普請で本丸の一部では石垣を積んでいるが、本丸を除く佐賀城の外堀の城内側護岸は、石垣を持たない土塁（土手）であった。佐賀の土は粘土状の軟弱土壌で崩れやすいため、その外堀の護岸・土塁の基礎には、板搦という干拓技術でもある土止め工法が用いられていたと考えられる（註24）。４区で見つかった遺構としての板搦は、横板を角柱の太い杭と裏側から竹で挟み込んだ構造であった（第７図）。これにより土塁の基礎が堀側に崩壊や流出するのを防ぐ役目があったと推察される。この工法は、佐賀藩において干拓技術が盛んであったゆえに用いられた土木技術であったと考えられる。しかし『泰国院様御年譜地取』（註24）によると、慶長期より用いられてきた土塁やその土止めの杭や板を用いた板搦が崩れ、朽ちてきた事が書かれている。そこで、

江戸時代中期、寛政９（1797）年以降に、佐賀で文献などにも記載されている石搦（註25）と呼ばれる赤石の石積（以降、赤石石積と省略する）により堀岸の崩落防止のための普請を行っている。当調査においては、赤石石積（石搦）の背面（城内内側）に板搦が残存し確認されたため、板搦を残した状態で堀側に新たに赤石石積で補強したという新旧の時期関係があり、佐賀城跡の発掘調査において、板搦から赤石石積という石搦への土木技術の変遷が窺えた初見と言える。また、文献に見られる板搦という土木技術が実際に発掘調査により確認をして記録されたと言う意味で意義深い。その後、2013年、佐賀市教育委員会による佐賀城跡７Ｂ区東堀護岸の発掘調査でも板搦が確認され、佐賀城跡８・９区ともさらに良好な状況で続々と発見された（註26、第７図の右下図）。

その他、西御門・桝形虎口の北西隅に隣接する佐賀城跡３区と４区の間の位置から平面形状がコの字状に赤石を積んで確認されており、船着き場の可能性がある（第７図の上図）。『泰国院様御年譜地取』（註24）には、普請に際し船の上げ下げのため外堀護岸５箇所（内一箇所について西御門南脇と記載）に雁木段を取り付けるべきと書かれているが、そこのコの字状の箇所から雁木段は確認できなかった。

## 5　近世佐賀城跡における２時期の本丸御殿跡調査

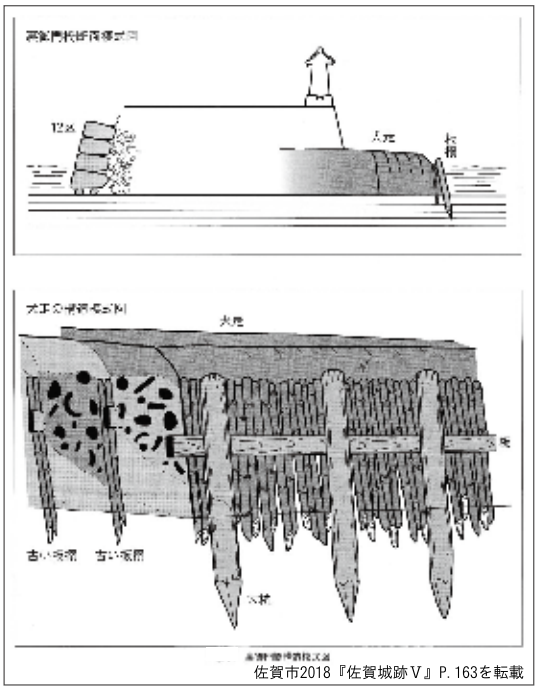
佐賀城本丸御殿跡の調査は、佐賀県教育委員会や佐賀市教育委員会により1993・1994・1999年度にはじまり、整備に伴い2001年度以降も調査が行われ、それらの調査成果を検証し、本丸御殿の一部を復元されている。その後、2017・2019年度に、明治維新150年「肥前」顕彰事業に伴い、佐賀県立佐賀城本丸歴史館から㈱埋蔵文化財サポートシステムに埋蔵文化財調査支援が委託され、佐賀県立佐賀城本丸歴史館と佐賀県文化財課が監理を行った。その内、筆者は、2019年に発掘調査を担当した。過去に佐賀城跡で実施された佐賀市教育委員会の１区・２区…のような調査区名とは異なり、2017・2019年度の調査では、新たな調査区名として調査区１～７が設定された（第９図）。調査は、佐賀藩10代藩主鍋島直正が再建した本丸御殿建物の設計平面図とされている「佐賀城御本丸差図（さしず）」（以降、差図と略する）と呼ばれる絵図と、発掘調査において実際に建物がどのように配置されていたのかを比較検討しながら建物跡の遺構検出を進めた。本調査では、この差図における建物図と調査における礎石の位置を確認する目的のみでなく、礎石の基礎構造や暗渠水路といった御殿普請における土木技術等を確認する事ができた。その礎石の基礎については、一般的な礫を用いる基礎だけでなく、佐賀特有の軟弱地盤に対応するために、赤石を横に積んだ基礎の上に礎石をのせるものや、蠟燭事業と呼ばれる赤石を縦に柱状にたてた基礎の上に礎石をのせるようなバリエーションが確認された。また、特筆すべき事は、壁と天井を赤石で組まれた幅約80㌢の暗渠水路が確認されており、第10代佐賀藩主の鍋島直正が御殿を普請する際に、元々移転前に御殿があった二ノ丸にから延伸し上水道として暗渠水路を引いたと筆者は考えている。この暗渠水路の取水源は、上水道である多布施川から佐賀城内に引き込まれた内堀からであろう。つまり、暗渠の経路（第８・９図）としては、現在のサガテレビ放送局の東側の開渠の内堀から東へ→二ノ丸旧御殿跡から南へ→本丸跡の東外側、現在の佐賀大学文化教育学部附属小学校の西端〔筆者は、調査区１の遺構の暗渠口から小学校側へ暗渠が続くのが目視で続く事を確認している〕から西へ →本丸御殿跡の敷地に入って直ぐの場所が、調査区１で確認された暗渠兼階段が設けられた水場遺構で、つまり本丸御殿の中では「奥」の空間に当たる場所に、真っ先に上水が供給されていた事になる。なぜ、上水道の暗渠が、二ノ丸跡に近い本丸御殿跡の北側から水路が設置されずに、わざわざ遠い南側から引き込んでいるのかと言えば、本丸御殿跡の配置が、北側に藩政機能の「外」の空間が、南側に藩主の日常空間である「内」や正室・継室達の生活空間の




佐賀市2010『佐賀城跡-4・5区の調査-』P.51
を転載・加筆　(左下写真も同く引用)

佐賀城跡5区における板搦の検出位置図

SW4004 板搦検出写真(初例)



佐賀市2018『佐賀城跡Ⅴ』P.163を転載

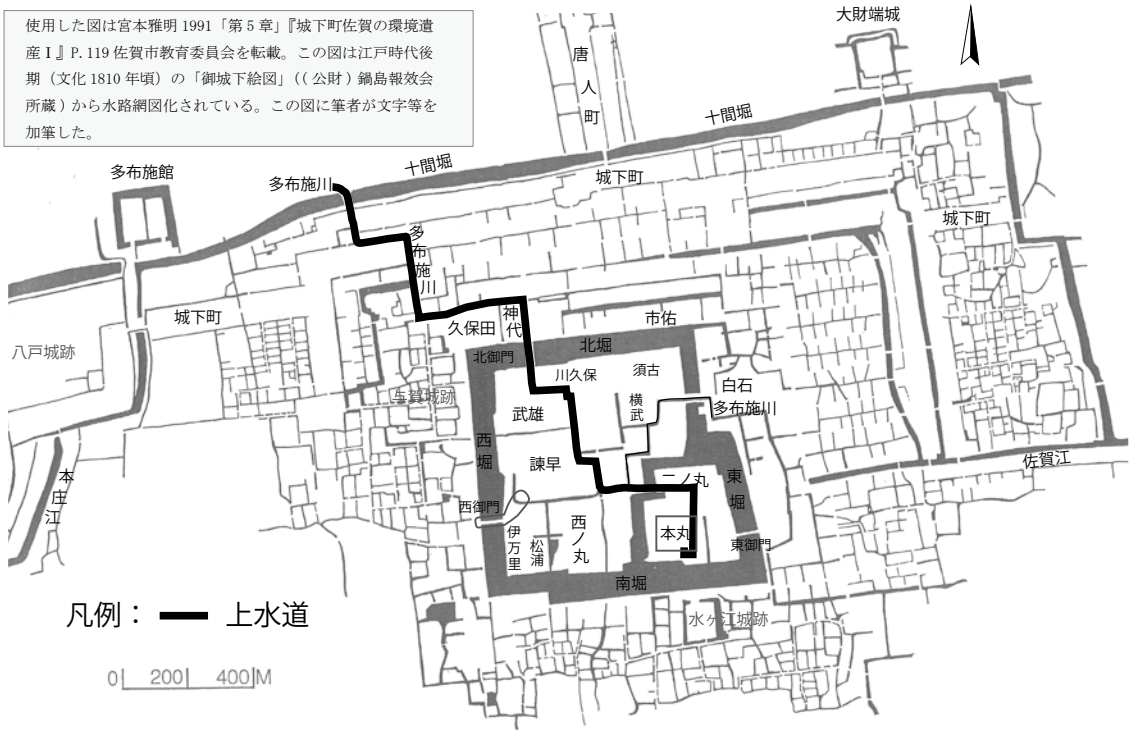
板搦模式図

**第7図　佐賀城跡5区検出の板搦位置図（S＝1/100）・写真および板搦の模式図**

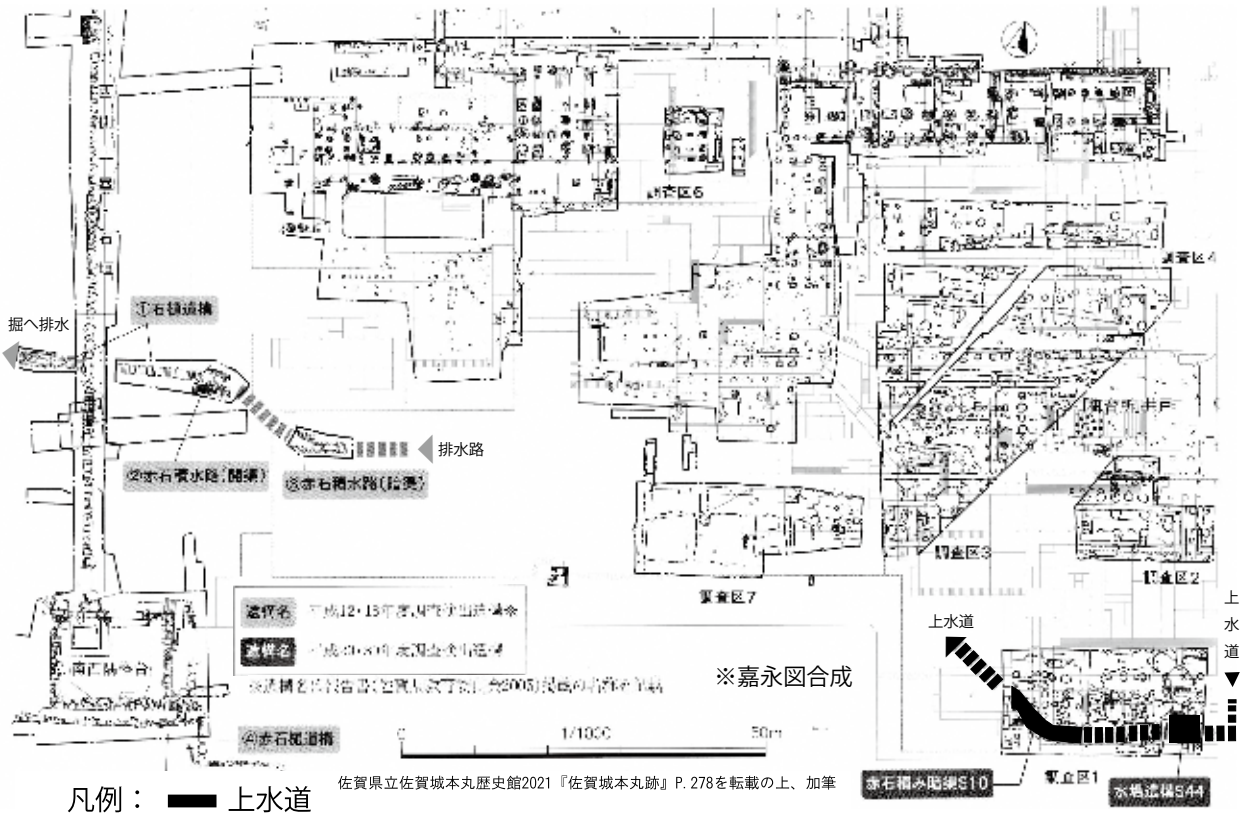
「奥」などの格式が高い空間でであったためと考えられる。ちなみに、2001年に調査された本丸跡の西端でも同様の構造の暗渠が見つかっており（註27)、上水道と考えられている調査報告書（註２・27）と筆者の見解は異なるが、その暗渠（第９図①石樋遺構～③赤石石積水路）は、本丸跡西側土塁の下を暗渠として潜り、土塁外の帯曲輪をさらに西に延び、その先は三ノ丸との間の内堀と接続する場所で見事に途切れている。すなわち本丸御殿内からの生活用排水溝であったと考えている。その理由としては、この内堀は、城内で多い上水道の役割を成していた内堀と異なり、城内の排水先の役目もあった外堀と接続し通水しているため、排水場所としては適している。さらに、この暗渠が、本丸御殿に引き込む暗渠であるならば、土塁と内堀間の帯曲輪の間は過去に調査されており、その続きも見つかっていてもおかしくないが、そもそも内堀に排水していたため、その暗渠の続きが見つからなくても当然ではなかろうかと思われる。

前置きが長くなったが、本題に入ることにする。2017・2019年度に行われた調査では差図が描かれた建物図と比較しながら進められたが、その際、発掘調査では礎石の検出やその配置に重点が置かれた。調査区中央に位置する調査区６（第９図）においても、幕末の頃に再建された天保期の本丸御殿の礎石のＳ41が確認されたが、その礎石と近接する場所で検出面が異なる礎石のＳ40が確認された。Ｓ40と41との比高差は、約0.2～0.3㍍であった。またＳ40礎石の表面には炭化物や焼土が確認された（第11図・写真３）。この様に礎石の高さが異なる事例は、慶長期の建物を確認する目的で1999年にトレンチ調査が行われた際に、天保期の遺構検出面より、約0.2～0.4㍍下でも礎石が確認されている（註２）。

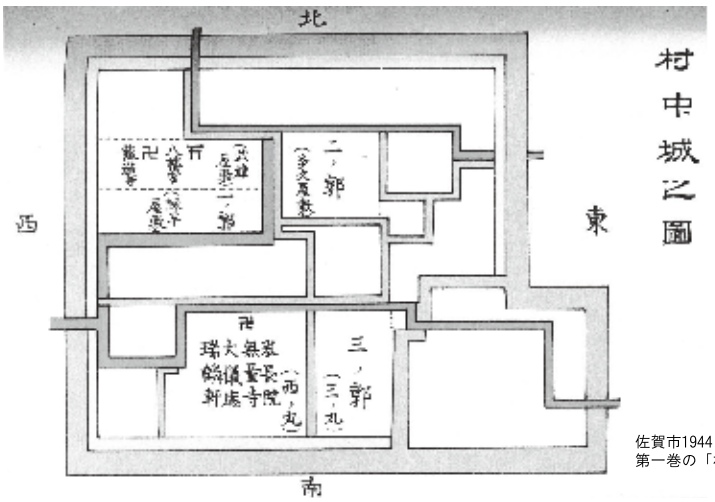
佐賀城本丸御殿は、慶長14（1609）年、慶長16（1611）年、慶長18（1613）年の３つの創建期の説（註28）があるが、本丸には当初、慶長期の天守御普請により創建された本丸御殿があった（註29)。しかし、佐賀城内では、江戸時代に２度の大きな火災があり、まず、享保11（1727）年の火災により本丸御殿が焼失したため、しばらくの間、本丸は空き地の状態だった。二ノ丸普請により御殿は、二ノ丸に建てられる。次に天保６（1835）年の火災により、二ノ丸が火災に遭い御殿が焼けた。そのため、火災の時期と同年に本丸に御殿が再建を始め、天保８（1837）年に上棟し、翌年、藩主の直正が本丸御殿に居を移した（註30)。この史実と調査区６の検出面・検出高さの異なる礎石の帰属時期を検討すると、Ｓ41は、差図において御殿の「御年寄」と書かれた建物の位置と一致する幕末の天保期の本丸御殿の礎石と考えられる。一方、Ｓ40礎石の表面には炭化物や焼土が確認されている事から、享保11（1727）年の火災によって焼失した慶長期の本丸御殿の礎石と考えられる。Ｓ40からＳ41までの間の約0.2～0.3㍍程の堆積層は、天保６（1835）年に本丸御殿を再建するために、Ｓ40の慶長期の生活面上に盛土造成した土木工事の跡だと考えられる。また、慶長期の建物を確認する目的で1999年にトレンチ調査を行った際に天保期の遺構検出面より約0.2～0.4㍍下で見つかっている礎石とＳ40との位置は、いずれも慶長期の建物の絵が描かれた「佐嘉城小城内絵図」（公益財団法人鍋島報公会蔵・佐賀県立博物館寄託）の大まかな御殿の絵ではあるが、位置が一致している。また、天保期の礎石の大きさに比べて、慶長期の礎石の方が小ぶりである。慶長期の礎石と天保期の礎石の間の盛土造成の層は、佐賀平野特有の粘土層と異なり、真砂土や山砂が混じる層であった。その盛土造成層の土は恐らく脊振山系の土で、立地的に考えて佐賀市大和町や富士町あたりが採取場であったのではなかろうかと思われる。天保期の普請では、佐賀城本丸内に、0.2～0.4㍍ほど盛土造成していると言う事は、それだけの大量の土砂をそれらの場所から、城下町や城内を通り、ひっきりなしに馬などを用いて人力で土砂運搬していたであろう大々的な普請の光景を想像できる。




**第 8 図　佐賀総構・城内上水道図（縮尺は任意）**

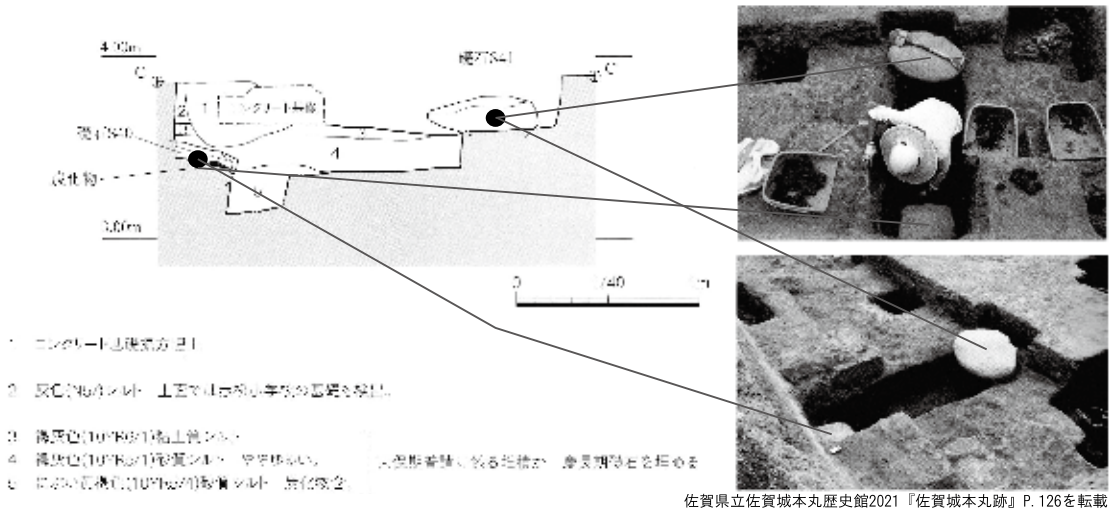



**第 9 図　佐賀本丸内　暗渠状　上水道図（Ｓ＝1/1,000）**



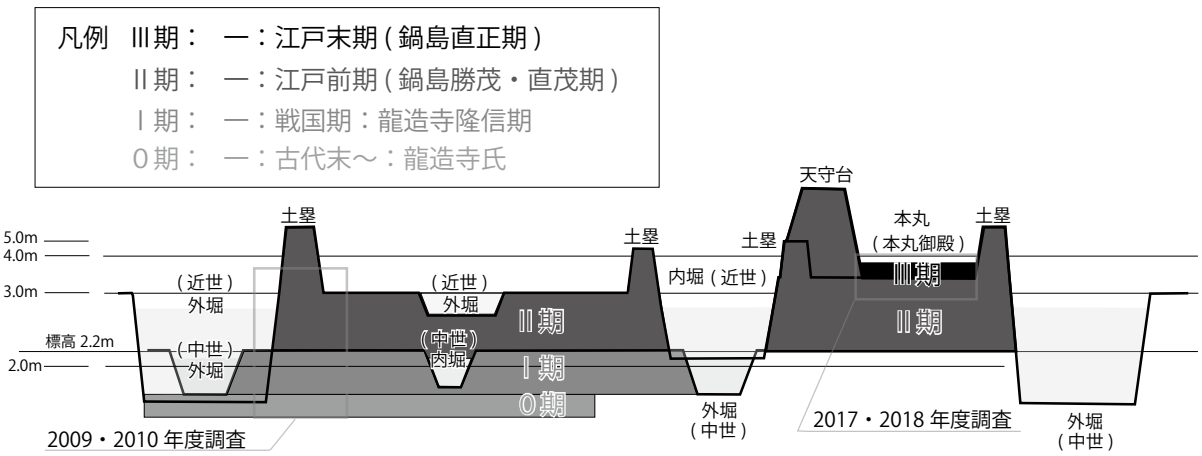

佐賀市1944「龍造寺氏」『佐賀市史』
第一巻の「村中城之図」P.30を引用

**第10図　中世佐賀城の佐賀城推定図「村中城之図」**



佐賀県立佐賀城本丸歴史館2021『佐賀城本丸跡』P.126を転載

**第11図・写真３　本丸御殿跡の礎石（Ｓ＝1/40）**




**第12図　佐賀城跡発掘調査の堆積状況から摸式的に復元した佐賀城の構造及び概念図**

## 6　考古学的調査に基づく佐賀城跡の変遷

筆者が佐賀城跡発掘調査で携わった本稿３～６章の内容を中心に、考古学的調査に基づいて佐賀城跡に関する時期について考えた時に、大きく０期～Ⅲ期の時期に分けることができる（第12図）。

### ０期　古代（平安時代）～中世（鎌倉時代）－龍造寺村の黎明期と成長期－

龍造寺氏が土着する黎明期から龍造寺村の成長期を【０期（ゼロ期）】とした。

佐賀城跡５区の調査では、古代の平安時代のＳＫ5100土坑とＳＥ5114井戸が見つかっている。これらの２基の土坑は、状況的に中世の遺構の掘削中にそれらの床や壁面で偶発的に発見されたものであり、この調査で中世佐賀城の面を削平（破壊）してまで下層の調査は行っていないが、これらの２基の古代遺構の状況からすると、おそらく５区の中世遺構面より下には古代の遺構面がある可能性が高い。

また、５区の調査では、戦国時代の遺構（中世佐賀城跡）と複合して溝状遺構が確認できた。この溝状遺構の遺構検出状況は、戦国時代の掘立柱建物群の遺構と切り合っており、溝状遺構が切られる形で確認された。また、遺構内には、12～13世紀の遺物が出土しており、鎌倉時代の畠状遺構と考えられる。この場所が、鎌倉時代の龍造寺村の畠地となっていいた可能性がある。

これらの古代の２基の遺構や中世鎌倉時代の畠地だけでは情報量が少ないが、龍造寺村の跡が中世佐賀城跡より下に存在する可能性がある手掛かりとなった。５区周辺で龍造寺氏が屋敷を構えて、龍造寺村を形成し成長していく過程の遺構が発見されていく事を、後世実施される事があるかもしれない発掘調査の機会に、期待したい。

### Ⅰ期　龍造寺隆信・政家・高房ら龍造寺宗家居城の中世佐賀城跡

龍造寺隆信らの居城である中世佐賀城跡の城内で確認された遺構の時期を【Ⅰ期】とする。

Ⅰ期に関しては、佐賀城跡５区の調査で確認されている。５区では、16世紀中～後半の遺物を含む大型建物群と小型建物群、堀や区画溝であった。東西に大型建物跡が１棟並び、その内の１棟は、桁行５間以上（以上とは調査区外に続く可能性があるため）×梁行３間という、一般の家屋の大きさを遥かに凌ぐ規模である。建物敷地内には、区画溝で仕切られ、建物群の北側に塀か柵の可能性のある遺構、その北に勾配50～70°、深さ2.4㍍以上の大溝など、これほどの規模の建物跡遺構と溝といった防衛機能を兼ね備えているという点で中世佐賀城（村中城）内の可能性が高いと言え、近世佐賀城を拡張・整備する以前に存在していた龍造寺居城である中世佐賀城（通称、村中城）内の龍造寺氏一族の屋敷か、その家臣の屋敷か、瓦が１点出土していることから中世佐賀城（村中城）内にあったと伝わる寺院の可能性もある。いずれにしても、中世佐賀城跡に関連する初めての発見と言える。

この発見された遺構の時期については、小型建物群の内の１棟であるＳＢ5040の柱穴から出土した柱材を放射性年代測定した結果、1550～1630年付近の値が出ている。ただし、大型建物群の遺構からは、16世紀中頃から後半の時期の遺物が出土している。そのため、小型の建物群が先行して16世紀前半に建てられた可能性があるものの、それ以外の遺構の大型建物群や区画溝・大溝は、遺構の状況や出土遺物から16世紀中頃から後半にかけての時期に帰属すると考えている。この時期の佐賀城は激動の戦乱期であるため、当城主である龍造寺隆信・政家・高房の段階で防衛のため大規模に城が改変された時期の城内の遺構と考えている。つまり、次のⅡ期の総普請で0.7～0.8㍍を盛土造成される際に、建物は解体され、溝等は埋め立てられたと考えられ、Ⅰ期の中世佐賀城跡が埋没する直前の状態の遺構と考えられる。

**Ⅱ期　鍋島直茂・勝茂が慶長期に普請した近世佐賀城跡と本丸御殿跡**

Ⅰ期の龍造寺氏の居城であった中世佐賀城跡を、佐賀藩の藩祖である鍋島直茂と佐賀藩初代藩主の鍋島勝茂の総普請によって拡張・整備された近世佐賀城跡の築城期を【Ⅱ期】とする。総普請は、龍造寺隆信の子の政家、孫の高房が没した翌年の慶長13（1608）年から開始している。つまり、近世佐賀城の築城は、龍造寺氏から鍋島氏へ政権が移譲した象徴と言えよう。

このⅡ期の総普請に係る盛土・造成を行った痕跡の遺構としては、佐賀城跡５区において、中世遺構面から近世遺構面まで0.7～0.8㍍程の層が盛土・造成されているのが確認された。この層の土砂の供給源は、近世佐賀城跡の外堀を掘削する際に排出された土砂を城内に嵩上げしたと考えている。

その他、近世佐賀城跡の外堀護岸は、総普請の際に石垣を用いず土がむき出しで造られている。佐賀城跡４区の調査では、外堀の西堀の城内側に位置するが、雨や堀内の水の浸食などにより崩壊を防ぐため文献にも出て来る佐賀で板搦と呼ばれる土木技術の痕跡が初めて確認されている。江戸時代中期頃、板搦でも護岸が崩れだしたため、佐賀で石搦と呼ばれる赤石石積の普請が行われている。

Ⅱ期の総普請では、Ⅰ期の龍造寺氏の城域を東側に拡張し、本丸と二ノ丸が設けられた。その本丸内の建物は、「佐嘉小城内絵図」によれば天守台の上に５層の天守閣や御殿が描かれている。2019年度に実施された本丸御殿跡の発掘調査では、幕末の頃に再建された本丸御殿跡の礎石より、0.2～0.4㍍ほど深いところから、それより古いと考えられる礎石と遺構面が確認された。礎石の堆積状況と礎石の規模から総普請に造られた慶長期の初期の本丸御殿跡の礎石と生活面であろうと考えられる。1999年のトレンチ調査でも同様の出土状況で礎石が確認されており、これらの礎石は総普請の際に建てられた慶長期の佐賀城本丸御殿跡の唯一の遺構である。この様に初期の本丸御殿の遺構が見つかりにくい理由としては、幕末の御殿再建前の盛土・造成により、慶長期の本丸の生活面が0.2～0.4㍍程の堆積層が覆われて埋没しているためである。

**Ⅲ期　鍋島直茂が再建した天保期の本丸御殿跡**

佐賀城本丸跡では、天保期に佐賀藩10代藩主で様々な藩政改革を成した鍋島直正が本丸御殿を再建しており、その時期を【Ⅲ期】とする。

2019年度、Ⅱ期の慶長期の初期の本丸御殿跡の礎石とその生活面は、層位的に礎石とその生活面の直上に火災に伴うと考えられる炭化物などが確認されており、その初期御殿の生活面より0.2～0.4㍍の盛土・造成の層が確認された。この炭化物の検出は、初期御殿が焼失した享保11（1726）年の火災に伴う痕跡と考えられ、この盛土・造成の層は、幕末の天保６（1835）年に本丸御殿を再建するに先立ち基礎工事として0.2～0.4㍍の盛土・造成を行った事を物語る、文献にも記載されていない貴重な情報である。

## まとめ

地域に伝わる伝承・歴史や文献や絵図と検証する手段として、考古学的調査は、地中に眠るいにしえの情報を調査し、そこで得られた情報と文献・絵図等とを比較・検証する事により、実際確認されたものはそれまで認知されている歴史の裏付けとなり、さらに正確な史実へと繋がると信じている。本稿は、考古学的手法に基づく発掘調査で確認された佐賀城跡の成果が、佐賀城の歴史研究を裏付けし、実証する事に繋がる事を目的とし、ひいては、調査で確認された土木技術を紹介すると伴に、過去に成されていない佐賀城跡における画期を０期～Ⅲ期に区分し、層位学的に異なる生活面を時系列に変遷をまとめる事を試みた次第である。この佐賀城跡の変遷考により龍造寺氏と鍋島氏が居城とし

た佐賀城跡は、同じ生活面に城を築いたわけでなく、数々の普請の度に盛土・造成を行っている事が判明した。逆に言うとこの様な盛土・造成を行われていたため、龍造寺氏・鍋島氏の居城である佐賀城跡の歴史の手掛かりである遺構は、きちんと地中に残されており、我々研究者にとっては、歴史を解明する上で大変貴重な資料となった。

## おわりに

私が発掘調査員として20年余り行って来た中で、佐賀城跡の発掘調査を担当した事があり、そこで得た発見については、いつか論文としてまとめる必要があると常々考えていた。ただし、頭の中にはぼやっとした構想があったものの、正直なところ、なかなか書き始める動機がなかった。

その切っ掛けとなったのは、2023年度に別府大学大学院文学研究科で非常勤講師を行うにあたり、文化財学研究Ⅴという講義の中でその一つの調査事例として佐賀城跡の調査の事を用いる事にした。兼ねてより佐賀城跡の堆積状況をモデル化したいと言う思いがあり、その講義資料を作成する際に堆積摸式図を作成したところ、そろそろ考古学的な発掘調査の成果に基づき佐賀城跡について執筆しようと思い、2023年の梅雨の頃より着手し始めた次第であった。佐賀城跡の発掘調査に関しては、筆者が担当した遺跡報告書で事実記載をまとめているが、中々、踏み込んで書けないところや書きそびれがあるため、本稿ではその事について整理し、まとめる事ができたと思う。また佐賀城については、文献史学の研究者より多く執筆されているが、発掘調査の成果に基づき、考古学的な手法を用いて、ようやく佐賀城跡の変遷を第12図のようにモデル化し示す事が出来たと言えよう。

とはいえ、中世佐賀城跡は、近世佐賀城跡に覆われる様に地中に眠る。佐賀城跡５区の調査は、その中世佐賀城跡の初発見ではあるものの、その存在した事を証明したにすぎず、当時の中世佐賀城跡の城郭の構造や実態を知るためには、今後の発掘調査において中世佐賀城跡が発見されていく必要がある。いつの日にか龍造寺隆信の屋敷跡が発見される事を期待したい。

**【謝辞】**

佐賀城跡の発掘調査の際、並びに本稿の執筆に際して井手基子・礒村康行・上野淳也・浦川和也・加藤裕一・古賀章彦・五島昌也・小石龍信・小宮睦之・七田忠昭・塩見恭平・渋谷格・島内浩輔・白木原宜・城野一郎・角信一郎・武谷和彦・立石和也・東貴之・樋口秀信・福田義彦・藤生京子・渕ノ上隆介・長﨑浩・長野暹・中田裕樹・中村修身・西田和己・三代俊幸・宮崎博司・宮武正登・山本紗希・吉田久美子諸氏に御教示・御協力を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

**【註】**

**註１**　佐賀城跡と佐賀城の用語について、本稿では、遺跡名としては佐賀城跡を用い、当時の城の事を指す場合が佐賀城と使い別けたい。いずれにも該当する場合は、佐賀城跡を主に用いたい。曖昧なものであると思うがご容赦頂きたい。

**註２**　加藤裕一・長﨑浩・宮崎博司・藤井祐介・五島昌也 2021『佐賀城本丸跡』明治維新150年「肥前」顕彰事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 佐賀県立本丸歴史館・佐賀県文化・スポーツ交流局文化課文化財保護室

**註３**　高野和人 1995『北肥前戦誌〔九州治乱記〕』青潮社
千住武次郎・高野和人 1873『肥前叢書』第二輯 青潮社
高野和人 1992『歴代鎮西志』青潮社
上記書は江戸時代中期から工期にかけて執筆された馬渡俊継『肥前戦誌』・『(九州) 治乱記』等を基に編纂している。
また、吉見岳城は、大友宗麟のみでなく、その後、豊臣秀吉が島津攻めの際に陣を置いた城でもある。

**註４**　宮武正登 2005「佐賀県の城と館」『佐賀県の中近世城館』佐賀県教育委員会文化課

**註 5**　古賀章彦 1999「小結」『長瀬一本杉遺跡 高木遺跡』佐賀市教育委員会

**註 6**　宮武正登 1995「佐賀平野の村と館－中世村落の成立と変化」『中世の風景を読む　第７巻　東シナ海を囲む中世世界』新人物往来社

**註 7**　神埼町教育委員会 1986『本告牟田遺跡・的小淵遺跡』
八尋実 1998「まとめ」「本告牟田遺跡０・Ⅰ区」神埼町教育委員会

**註 8**　徳永貞紹 1996「下六丁遺跡」『筑後川下流用水事業に係わる文化財調査報告書２』佐賀県教育委員会

**註 9**　河野知郎 1996『姉川城跡』神埼町教育委員会 宮武氏の分類方法（宮武1995）に習い神埼市域で分類している。

**註10**　河野知郎 1997「２．環濠集落の分類」『横武城跡』神埼町教育委員会
神埼町教育委員会 1993『姉川城跡（ⅩⅡ区)』神埼町教育委員会

**註11**　佐賀県立図書館 1993「直茂公譜考補十」『佐賀県近世史料』第一編第一巻の「佐嘉御城普請」(『葉隠聞書六』)の P.816～ P.817から引用した。

**註12**　佐賀県立図書館 1993「勝茂公譜考補」『佐賀県近世史料』第一編第二巻　P.264から引用した。

**註13**　中村修身 2007「筑前国秋月氏の城郭　巨大規模城郭とそれをささえた組織」『海路』「海路」編集委員会氏は「龍造寺氏の居城（本城）に関する資料を持ち合わせていないが、今日の調査成果や立花城の例から北部九州の有力国人衆ないし戦国大名は、巨大規模城郭を造っていたと考えられる」ことを述べている。中村氏から調査中に遺構を実見して頂き巨大規模城郭と言って良いのではないかと言うご教示を賜った。

**註14**　大坪芳典・角信一郎・中田裕樹・島内浩輔・杉山真二 2010『佐賀城跡－４・５区の調査－』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第56集 佐賀市教育委員会

**註15**　佐賀市 1944「龍造寺氏」『佐賀市史』第一巻　村中城の名称の由来については、P.30から引用した。村中城内の村中城之図が描かれている。(P.30の次のページに掲載されノンブルがない。)
川副博 1977「中世Ⅱ 一～四」『佐賀市史』第一巻　佐賀市

**註16**　佐賀県立図書館 2007「泰巖公御年譜」『佐賀県近世史料』第八編第三冊による。泰巖とは龍造寺隆信の法名(法雲院殿泰巖宗竜大居士）である。『泰巖公御年譜』は漢文体年譜記録である。

**註17**　佐賀県立博物館 1958「龍造寺家文書」『佐賀県史料集成』古文書編第三巻の「大宰府庁下文案」

**註18**　佐賀県立博物館 1958「龍造寺家文書」『佐賀県史料集成』古文書編第三巻の「沙弥某書下」

**註19**　川副博・川副義敦 2006『五州二島の太守　龍造寺隆信』佐賀新聞社　本書は、龍造寺家や龍造寺隆信の事の事が詳しくまとめられており、佐賀城跡５区の調査や報告書作成において、大いに参考になった。

**註20**　佐賀県立博物館 1958「龍造寺家文書」『佐賀県資料集成』古文書第三巻の「大内義隆書状」・「官途吹挙状」

**註21**　古賀章彦・島内浩輔 2007『佐賀城跡－２区・３区の調査－』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第18集 佐賀市教育委員会

**註22**　佐賀県図書館 1998「泰國院様御年譜地取十二」『佐賀県近世史料』第一編第六巻　西御門の読み方は「にしのごもん」である。

**註23**　高瀬哲郎 2019「佐嘉城跡の「石垣」と「修復現場」に想う」『佐賀城跡Ⅵ－西堀の調査・整備－【第一分冊／調査編】』佐賀市教育委員会に佐賀城跡石垣の出角部などについてまとめられている。

**註24**　佐賀県図書館 1998「泰國院様御年譜地取二十八」『佐賀県近世史料』第一編第九巻に記載されている。

**註25**　佐賀藩に置いて搦（カラミ）とは、杭をある程度の間隔で打ち込み、それに竹などで「カラミ」つけて柵をつくる事で有明海干拓堤防の土台（基礎）の芯の役割を成す。搦の文字は、文献のみでなく、地名においても近世以降の干拓堤防やその跡で残る。佐賀藩により積極的に進められてきた干拓堤防の事業において、軟弱土壌を補強するためと、有明海からの波や潮受けに耐えるために搦は欠かせなかった。
最近では2018年に佐賀県による六千土居跡の調査でも「シガラミ状遺構」として報告されている。市川浩文・里見博章・嘉村俊也 2020『六千間土居跡（有明海近世干拓堤防跡）有明海沿岸道路建設（武雄福富線拡幅）に伴う埋蔵文化財調査報告書』佐賀県文化財調査報告書第225集　佐賀県文化・スポーツ交流局文化課文化財保護室
この干拓技術は、佐賀城の普請においても、板搦や石搦として城作りの技術として用いられている。そのため石搦とは、通称赤石を積んでいるため石垣と言いたいところであるが、佐賀においてその赤石石積は、搦の役目で土止めしているため石搦という用語が尊重される。

**註26**　松本隆昌・三代俊幸 2017『佐賀城跡Ⅴ 東堀の調査・整備』佐賀市埋蔵文化財調査報告書第114集　佐賀市教育委員会

**註27**　五島昌也・内田雅文 2005『佐賀城公園整備工事報告書－県史跡「佐賀城跡」本丸土塁石垣に関する調査・復

元工事報告－』佐賀県文化財調査報告書第161　佐賀県教育庁文化課

**註28**　古賀利幸 1996「佐賀城再現図録」『城郭史研究』16号 日本城郭史学会

**註29**　「佐嘉城小城内絵図」（公益財団法人報效会所蔵）に慶長期の本丸御殿が描かれている。

**註30**　佐賀県図書館 2003「直正公年譜地取」『佐賀県近世史料』第一編第十一巻　に記載されている。

**【引用・参考文献】**


池田史郎 1981「佐賀城」『九州の城』小学館

池田史郎 1984「佐賀城と佐賀城下町の成立」『九州近世史研究叢書』第七巻 九州と都市・農村 国書刊行会

勝俣鎮夫 1994「15-16世紀の日本－戦国の争乱」『岩波講座日本通史』第10巻中世４ 岩波書店

川副博 1942「龍造寺隆信五州時代分限張 隆信公幕下着到」『肥前史談』第十六巻第二号 肥前史談会

川副博 1942「龍造寺隆信五州時代分限張－「隆信公幕下着到」（二）－」『肥前史談』第十六巻第三号 肥前史談会

川崎桃太 2003「竜造寺隆信」『フロイスの見た戦国日本』中央公論新社

北島万次 1983「天正期における領主的結集の動向と大名権力－肥前・筑後の場合－」『九州大名の研究』戦国大名論集７ 吉川弘館

木島孝之 2001『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会

小島道裕・千田嘉博 1994「城と都市」『岩波講座日本通史』第10巻中世４ 岩波書店

小宮睦之・西田和之・浦川和也・福田義彦 1996『佐賀城跡－佐賀城本丸跡埋蔵文化財確認調査報告書－』佐賀市文化財調査報告書第76集 佐賀市教育委員会

小宮睦之 2005「佐賀城下、唐人町、唐人新町」『海路』第２号「海路」編集委員会

小宮睦之 2009「佐賀城の歴史」『海路』第７号「海路」編集委員会

公益財団法人鍋島報效会 2009『御城下絵図に見る佐賀のまち』

佐賀県教育庁社会教育課 1964「九、人面墨描土器出土遺跡」佐賀県教育委員会

佐賀県立博物館 1995『戦国を駆ける武将たち－五州の太守 龍造寺隆信の時代－』

下山正一 2008「有明海が語るもの　縄文海進と佐賀平野…東名遺跡からわかる佐賀平野の形成…」『有明の海と縄文人－東名遺跡が語るもの－』佐賀市教育委員会

杉谷昭・佐田茂・宮島敬一・神山恒雄 1998『佐賀県の歴史』山川出版社

千田嘉博 1999「中世城郭都市の形成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第77集 国立歴史民俗博物館

千田嘉博 2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会

千田嘉博 2009「姉川城と平地城館から考える中世」『神埼の城館跡と環濠集落－水の里神埼・堀に刻まれた中世の風景－』神埼市教育委員会

高島忠平・七田忠昭・高瀬哲朗・高山久美子・田平徳栄・多々良友博・東中川忠美 1980「佐賀市・神埼郡・佐賀郡・小城郡」『日本城郭大系』17長崎・佐賀　新人物往来社

谷澤仁 1999「肥前国府周辺の地割について－肥前国府域における地割と官道を基準とした施工計画について－」『考古学ジャーナル』449

中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』平凡社

堤安信1999『直鳥城跡』千代田町教育委員会

中村修身 1995「山城・館から近世城郭へ」『玄海幹線工事に係る文化財確認調査－青山城跡ほか中世山城－』唐津市教育委員会

服部英雄 2007「中世城郭の復元と史料学」『遺跡学研究』日本遺跡学会

東中川忠美 2002「考察」『鍋島藩窯』鍋島藩窯研究会編

日野尚志 1997「肥前國佐嘉郡の条里について（その一）」『佐賀県地籍地図集成（四）肥前國　佐嘉郡一』佐賀県教育委員会

日野尚志 1999「肥前國佐嘉郡の条里について（その二）」『佐賀県地籍地図集成（五）肥前國　佐嘉郡二』佐賀県教育委員会

日野尚志 2001「肥前國佐嘉郡の条里について（その三）」『佐賀県地籍地図集成（六）肥前國　佐嘉郡三』佐賀県教育委員会

日野尚志 2004「肥前國佐嘉郡の条里について（その四）」『佐賀県地籍地図集成（七）肥前國　佐嘉郡四』佐賀県教

育委員会
藤野保編 1981『佐賀藩の総合研究－藩制の成立と構造－』吉川弘文館
堀本一繁 1994「龍造寺氏の二頭政治と代替り」『九州史学』第109号 九州史学研究会
三浦正幸 1999『城の鑑賞基礎知識』至文堂
宮武正登 2009「北部九州の低平地城館と中世神崎」『神埼の城館跡と環濠集落－水の里神埼・堀に刻まれた中世の風景－』神埼市教育委員会
宮本雅明 1991「第２章 城下町佐賀の形成、第５章 城下町佐賀の環境遺産」『城下町佐賀の環境遺産』Ⅰ 佐賀市教育委員会
三好不二雄 1977「与賀本荘・与賀新荘」『佐賀市史』第一巻
山村亜希 2009『中世都市の空間構造』吉川弘文館